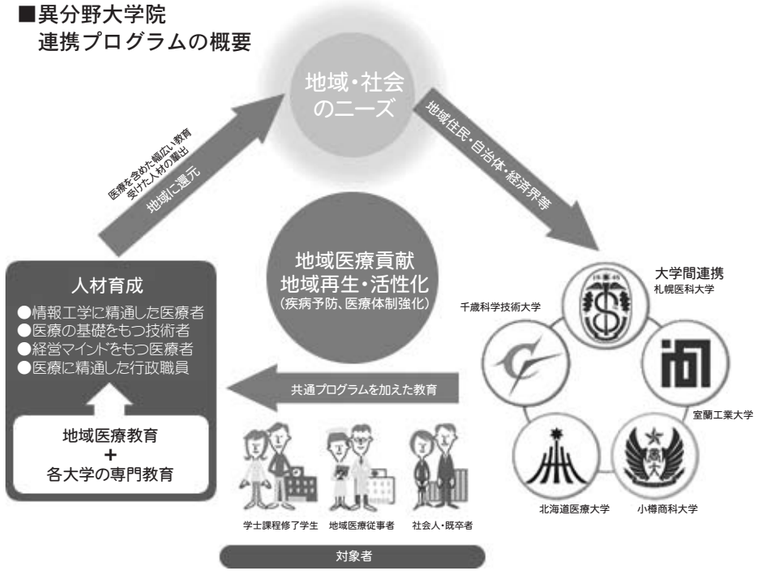
地域から発信する医療人材の育成と交流拠点「るもい」を目指して

地域医療を支える医療人の不足と偏在が、地域医療崩壊の大きな要因と考えられています。地域医療へ貢献できる人材育成が急がれる中、留萌市では、るもいコホートピア構想を推進しながら、医育大学と連携し、地域の医療、介護についての現状を医療人教育の糧として提供することで、地域から将来の医療人確保に向けた育成環境、交流拠点づくりの発信に向け取り組んでいます。

■異分野大学院
連携プログラムの概要



平成22年度の取り組み

平成22年度、札幌医科大学を中心に、室蘭工業大学、小樽商科大学、北海道医療大学、千歳科学技術大学の道内5大学が連携し、将来の医療人を志す異分野の大学院生を対象に、それぞれの教育分野において、医療をサポートする人材の育成を目指した「異分野大学院連携教育プログラム」がスタートしました。

このたび、同プログラムの臨地実習が7月27日から29日まで、留萌市で行われることとなりました。今回の実習では、留萌市立病院のほか、るもい健康の駅、地域包括支援センター、さらには市内介護事業所の協力を得て行われ、異分野の学生が医療、介護の現場からそれぞれの分野における関わりや地域の実情を学び、最終日には、当実習を通じてつかんだ地域の課題などについて、学生による実習報告会も予定されています。

また来年には、札幌医科大学医学部の学生による地域実習も予定されており、これらの取り組み、受け入れをきっかけに、今後、留萌市が地域医療を学ぶための洗練された地域密着型実習の医療教育フィールドとなって、医育大学との人材交流や教育成果を地域で実践できる関係が築けるものと期待しています。

年間10名程度医学生が訪れる留萌市立病院。治療をチームで支えていく消化器病センターや高性能の64列マルチスライスＣＴなど、学生達は地域の２次医療を提供する中核病院としての機能、診療体制について熱心に学んでいます。

対談 ―地域医療の現状と人材育成への期待―

笹川　裕
留萌市立病院院長

相馬　仁
札幌医科大学医療人育成センター教育開発研究部門教授

―地域医療の現状と大学が目指す医療人材の育成についてお話をお聞かせください―

相馬教授　「広大な医療圏を抱える北海道では、医療過疎、特に、絶対的な医師不足は深刻で、地域医療の崩壊を招きつつあり、ひいては地域の産業にも大きな影響を与えるものととらえています。札幌医科大学は、医学部と保健医療学部を持つ医療系総合大学として、実践的かつ高度専門教育を基本方針に、地域医療を担う人材の育成に努めています。その結果、卒業生の高い道内定着率などの実績を積み重ねており、現在、地域に密着した学生の育成プログラムをはじめとする教育に力を注いでいます」

―医療人の不足と偏在の現状について、特に医師確保に奔走する院長としてはどのように感じていますでしょうか―

笹川院長　「医師不足は、全国的に起きている問題であり、特に地方病院に関しては大変厳しい状況にあります。このような状況は、地方における医療難民の増加を促し、命の平等性も損なうことが懸念されます。当院においても、泌尿器科医や呼吸器内科医については不足している状況で、今後も全力で医師確保に努めていきたいと考えています」

―今回はじめて、異分野の大学院連携教育プログラムをスタートさせましたが、そのねらいと留萌での地域実習での期待をお聞かせ下さい。―

相馬教授　「医療はメディカルスタッフのみで行われるものではありません。医療システムの中では、情報・工学などの技術的な支援が不可欠で、医療にかかわる工学・情報・経営には充実した医療教育が必要であると考えています。異分野の大学院連携教育プログラムは、医療系、工学系、情報系、経営系の国・公・私立大学法人5大学が連携し、北海道の医療及び保健福祉を中心とした地域活性化のための人材育成を目指すものです。地域の今日的課題を発見し、即戦力となる高度専門職業人が輩出されることを期待しています」

―地域の中核病院として、地域自らが進める将来の医療人材育成に向けた教育環境の意義についてお聞かせください。また、医療人を教育する側からみた理想的な地域実習フィールドについてお聞かせください―

笹川院長　「今回の異分野大学院連携プログラムの実習場所として、留萌市立病院が選ばれたことは大変光栄に思っています。これからの医療は、経営面や技術面などを補える多種多様な人材育成が必要となっており、医療現場から連携や教育プログラムを組むことにより、即戦力となる人材を確保できると考えています。また、地域中核病院としての市立病院は、地域に根ざした病院を理念に運営しています。学生にとっては、一つの医療機関という視点ではなく地域の特色や患者特性を知る機会が得られ、医療の大切さや重要性を再認識できるでしょう」

相馬教授　「留萌市立病院が二次医療の中核となって留萌地域の医療を担い、様々な課題に取り組んでいますので、地域住民の生活を守るという大きな役割があります。るもいコホートピア構想とも関連しますが、留萌市立病院は、疾病予防、高齢者に対する医療・福祉、生活習慣病などの現代医療が抱える課題に積極的に取り組んでいる施設ですので、学生の教育を行うことを考えたときに、一番にお願いしたい施設です」

―るもいコホートピアの取り組みを通じた医育大学との連携と今後の期待についてお聞かせください―

相馬教授　「留萌での医学研究と大学の臨床大学院制度が連動されており、地域の臨床研究により学位を取得できるという特徴があります。また、地域医療連携や医学研究に価値あるデータベースづくりなど、疫学研究フィールドを提供することにもなり、若い医師に魅力的なキャリア形成・研修の場となります。本学のような医療大学の学生にとりましては、医療に直結して学部教育から大学院教育までを留萌地域で学べるということになり、非常に魅力的なモデル地区と言えるのではないでしょうか。今後、医療系大学のみならず、異分野の学生にも注目され、医療・福祉に関して教育・研究の場となれば、今までにない新しい医療・福祉の方法が提案されるものと期待しています」

お問い合わせは
市・コホートピア推進室
（るもい健康の駅内）
☎43・8121